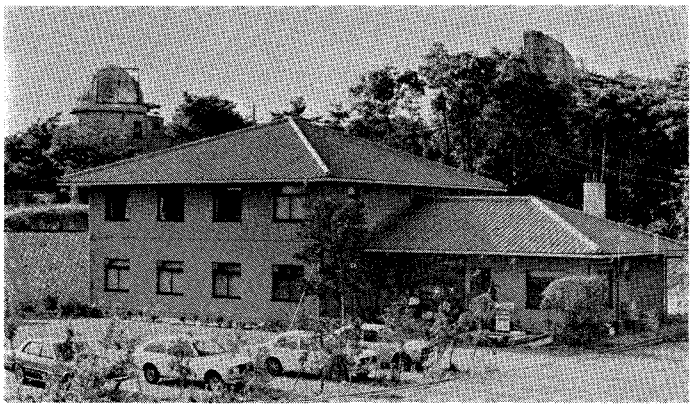
日本の観測所めぐり　(9)

京都大学　花山天文台

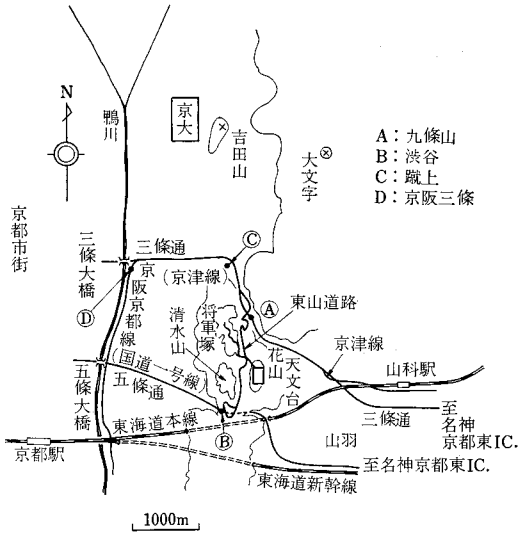
京都東山三十六峰のひとつ花山山は，清水山の東側にあり，花山天文台はその山頂（標高 221 m）に 24,000 m² の敷地をしめる．市街の中心部からは見えないが，山科地区を通る東海道新幹線や名神高速自動車道の車窓からよく遠望される．名称をローマ字で Kwasan とかいているのは，同音の Kazan と区別するためでもあるが，この附近一帯を「くわさん」ということによる．

現在の京大附属図書館の西側にあった旧宇宙物理学教室の観測部門を移設して 1929 年に発足して以来，太陽・月・火星・小惑星など太陽系天体の研究を主軸にして活動し，60 cm反射鏡，新太陽館（70 cm シーロスタット・分光器）を新設，また生駒山太陽観測所，飛騨天文台を分離するなど，幾多の変遷をへて来た．設立当時の五つの建物のうち，太陽館と木造の宿舎を撤去して新館が建てられ，クック 30 cm 赤道儀はツァイス 45 cm ニュートン型(？)屈折望遠鏡に改装され，バンベルク 9 cm 子午儀は倉庫入りして久しいが，ザートリウス 10 cm 赤道儀（1910 年ハレー彗星の回帰時に購入）はなお，太陽黒点等の観測に使用されている．

最近は PDS μ-10 マイクロデンシトメーターと VAX-11/750 コンピューターを導入して，画像解析システムが運用に供せられ，各地での観測結果の解析に成果をあげているほか，新しい観測技術の開発，資料，情報のセンターとして観測の前線を支援している．



新太陽館屋上から本館，別館，ドーム，及び新館をのぞむ．新館一階に京大理学部附属気候変動実験施設がある．



60 年近い歴史の間に周辺の環境も次第に変化している．1959 年花山道路に沿って，三条通の九条山と五条通の渋谷を結ぶ東山道路が開通し，日常の便はよくなり，それと共に街の騒がしさがおしよせている．創設当時からドームが遠望できる地点などに，天文学史の著名人になぞらえてつけられていたいくつかの地名も，車で一気に通過する昨今では口にすることもまれになってしまった．旧道の踏み跡や，旧伏見工兵隊による当時の建設記念碑さえも雑木林にかくれ，かなり天文台に接近しないと，ドームをさしのぞむことができない．

花山天文台へは九条山（A）又は渋谷（B）から徒歩 20 分，車ならば，三条通蹴上（C）から南進し最初の信号を左折，又は五条通渋谷，東山トンネルのすぐ西を左折して，東山通路に入り，将軍塚への分岐点の南 150 m で東に入ればよい．京都駅あるいは京大附近からタクシーで 6 km 約 1000 円である．

九条山（A）へは京阪三条（D）から京阪電車京津線，京都市バス東系統あるいは京阪バスなどで 10 分，渋谷の入口（B）は市バス清閑寺前，京阪バス山の内町がそれぞれの停留所の名である．

20 年ほど前までは日をきめて定期的に一般への公開見学の便をはかっていたが，現在では中止している．

昭和61年 8 月20日　発行人　〒181 東京都三鷹市東京天文台内　社団法人 日本天文学会
印刷発行　印刷所　〒162 東京都新宿区早稲田鶴巻町 565-12　啓文堂松本印刷
定価 450 円　発行所　〒181 東京都三鷹市東京天文台内　社団法人 日本天文学会
電話 (0422) 31—1359　振替口座 東京 6-13595